

《正岡子規(36)の続き》その269
子規周辺の人びと(十九)

平岸 三三

子規が郷党の与望による、健康を維持し、学業を成就することは、二つながらなしとげることができなかった。

若し子規が、普通の健康体を保ち、普通並の学生生活を送り、大学を卒業し、文学士の称号を勝ち得たとしたならば、どんな後半生を送ったろう。

当時、学士の称号を得たのは、唯一の大学の東京大学の各学部の卒業生と、札幌農学校・駒場農学校の卒業生に与えられた農学士の称号だけ。

当時の学士は、各学部共に数人を数えるくらいの少人数(医学部は多少多い)であつて、卒業生は各方面から引く手あまたであつたであろうから、子規も卒業して常盤会の給費をはなれ、一家の主人公として母堂と妹を扶養する身になれば、当然就職を考えねばならなくなつた筈である。

或は大学院に入学して、学者としての一步を踏みだすのも可能であつたであろう。健康が良好で、学業にも精を出していれば、学者への道も考えられた。

親友の漱石も明治26年7月、英文科の唯一人の卒業生となり、直ちに大学院学生となり、東京高等師範学校の英語嘱託

となつたが、二年後には愛媛県尋常中学校(松山中学)に赴任し、更に一年後には熊本第五高等学校の講師、更に教授となり、二年間の英国留学を経て、東京に帰り、東大、第一高等学校の講師となり、学者の道歩んだ。

子規も同様に、中学或は旧制高校の教師として安穩な一生を送つたかもしれない。当然、結婚問題もおこるし、子孫を残したかもしれない。

漱石の子孫が、現に活躍している。半藤一利(作家・評論家として著明。長女筆子が弟子の松岡 譲との間に生れた女性と結婚)や、夏目房之介(漫画評論家。嫡子夏目純一の子)など、漱石の孫の時代となり、その活躍を見つつある。

子規も健康体で大学を卒業し、然るべき職業に就いているとすると、普通なら妻帯問題がおきる。結婚の色慾より発するは、論なし。

子規の随筆集「筆まかせ」第一編に、点数表と題する一文がある。学校の寄宿舎の同級生がお互いに、「容色」「修飾」「洒落ツ気をいうか」「色慾」「食慾」「胆力」「忍耐」「勉強」「才気」のそれぞれにつき点数をつけたものである。22人の合評だから、先ず正当に近いと見てよいであろうとある。但し各人、標準を異にし、見解を異にする故、一致しないことも多い。最も分りやすいのは食慾と勉強で、最も知り難いのは色慾と胆力だという。

100点満点の22人の平均点であろうが、大食を以つて鳴り、瀕死の病床にも食慾

の衰えなかつた子規でも、その点数は86.4で第四位である。最高位は92.0。上には上があるものである。

勉強は十一位の72.5、第一位は93.4。胆力は第九位の70.8。第一位は89.4。問題の色慾は、第十四位の79.5。第一位は92.3。

才気については、子規は84.9で第一位である。才気といつても、何に向つての才気か、俗才か、学才か、そこらも評者によつて違つてであろうと、子規自ら、第一位となつたのを疑つてゐるような口吻である。しかし仲間から、いわゆる才子と認められていたのである。

何事にも、仮定のことには答えられないのは当然である。現代に正岡 某という作家がいたり、俳人がいたりして「父としての子規」や「祖父・正岡子規」などの文章を発表したらどんなものだろう。しかしそれらのなかに、子規の病牀六尺の生活や、俳句や和歌の革新や、新しい文章(写生文)の提唱などがあるのか、ないのか。恐らくそれらはないと見なければなるまい。

漱石は満49歳という短命ながら、多くの文学作品を残している。教職を辞し、朝日新聞社に入社して、専業作家となつたのだから当然としても、子規も結核菌に触まれることなく、健康な一生を送つたとして、漱石と競うくらいの文章を残しただろうか。病気前の青年時代からの筆まめを勘案すると、たとえ作家とならずとも相当の文を残したのである。